

# 母親たちの子育て支援—自助から共助へ—

有 北 いくこ

## ＜ キーワード ＞

子育て情報誌、子育て支援、相談、講座、サロン、ネットワーク、NPO 法人、問題点

## ＜ 要 旨 ＞

地域内の子育てに関する情報が欲しい！ NPO 法人ままとんきっずの活動は、1993 年 5 人のお母さんたちによって始まった。市民館講座からスタートした活動は、情報誌作りから単行本の制作、講座、コンサート、リサイクル、サロン、相談、ネットワークへと広がり 2002 年法人化し、現在も様々な支援へと広がり続けている。

- 子育ては格闘です。自分と違う存在をどう理解し、愛し、導いていくかの格闘です。とても疲れます。一人でなんとかとてもできません。
  - 子育てには終わりはありません。子どもが生まれたときから親子の関係は永遠に続きます。そしておかあさん自身も親との関係においては子どもなのです。親がいて子どもがいるということは人間の自然な営みです。おかあさんだけでなく、おとうさんもおじいちゃんおばあちゃんも、隣の人も、全ての人がその営みの中で生きています。
  - その営みを包んでくれる社会や自然な環境や時間があります。
  - そんなひとつひとつを見つめ直すことで、気づかなかったり、忘れていたり、おろそかにしてしまったり、時には傷つけてしまったり、失ってしまったことを、とらえなおしながら、前を向いて進んでいきたいと私たちは願っています。
- このままとんを通して、おかあさんたちが少しでも勇気づけられるようなことに出会えばいいなあ、と考えています。そしていつか、もっともっと自然に子育てができればいいなあと思っています。  
(ままとんきっず コンセプト)

### 1. 子育て情報が欲しい！—必要な支援は自分たちで創り出す

NPO 法人ままとんきっずの活動は、1993 年 5 人のお母さんたちによって始まった。

92、93 年に川崎市多摩区多摩市民館の子育て中のお母さん向けの保育付き講座「子育てネットワークプランナー」を受講したうち数人が、その後も自分たちで活動したいと集まったのが最初だった。

この講座は、お母さんたちが好きなテーマを見つけて数人ずつのグループに分かれ、いくらかずつの予算を付与され活動するというものであり、それぞれコン

サートや講演会、バス旅行などを企画した。その中に多摩区の子育て情報誌を作ろうというグループがあり、そのメンバーが講座後も残ったのだ。

当時、地域には子育てをテーマとした情報誌はなく、マスコミが行政の広報紙に載るものだけが頼りだった。しかし、それらは地域内の子育てに必要な情報としては不十分で、断片的であり、地域で子育てをするという視点に立ったときに役立つものではなかった。

今でこそ日本中の様々な地域で子育て情報誌が作られているが、10 年前は数えるほどしかなかったのだ。講座内で作った情報誌には行政からの束縛があり、



公園や行政施設情報が主で、お母さんたちの本当に欲しい情報である医者・病院、商店、幼稚園・保育園といった情報は名称と住所くらいしか載せることができず、作りはしたものの消化不良の状態で、部数も限られていた。それならば、自分たちの手で改めて作ろうということになった。

だが、講座ではついた予算が、自主活動ではない。お母さんたちの自由になるお金は限られている。なんとか資金を作りたいと思った母親達は企画書を作り、協力要請に地域内の企業回りを始めた。

しかし、当時はちょうどバブルがはじけた時期で、協力をしてくれるところはなかなか見つからなかった。何度も諦めかけたがやはり作りたいという思いが強く、では自分たちでなんとかしようということになり、印刷製本費は広告を集めることで調達することになった。そして93年秋、正式に本作りをスタート。全体企画、記事の内容を詰め、取材と並行して広告取りもし、原稿を書き編集、レイアウト、版下作成まで全て自分たちで行い、94年7月『ままとんきっず』1号が発行になった。A5判・128ページ・表紙4色・本文1色・本体価格680円・発行部数4,000。

子育てに役立つ情報をと始めた本作りであったが、1号発行までの道のりは厳しく、最後の2ヶ月ほどは皆パソコンの前に布団を敷いて寝起きをするような状態で、夫はもちろん子どもの世話もどのようにやっていたのかわからないほどだった。何ごとかと初めは怪訝気に様子をうかがっていた夫達も、脇目もふらず夢中になって作業に没頭する妻達の姿に、最後の方は「お母さんは今忙しいんだからそばに寄っちゃダメだ

よ」と子守りを引き受けるまでになっていた。

幸い1号は、地域で初めての子育て情報誌ということもあり話題を呼び、同じように情報を求めているお母さんたちによって完売。同時に行った市制70周年を記念した市民企画の子育てコンサートも満杯になった。そして、こんな情報誌が欲しかった、自分も一緒に活動したいという声が多く寄せられた。

作業の大変さから一度はこれで終了しようと思ったメンバーだったが、反響の大きさに続けて発行することを決定。まだ幼児を抱えての活動であったため、半年に1冊を作るペースで行こうと決めた。

1号の内容を紹介すると「食・買・遊・育・知・困」の6つのテーマ別に、地域（川崎北部、横浜北部、稲城市、周辺地域の生活圏）の情報を集め、それぞれで特集した内容になっている。地域マップから表紙デザインまで全て自分たちの手で行い、書店への営業、納品、集金も行った。

その後半年に1冊といいながらも、子どもの病気や生活上の様々な都合でそのペースを守るのはなかなか大変で、また合間に単行本の制作も始めたため、『ままとんきっず』としては現在まで15冊の発行となっている。内容は1号に準じたものであったり、丸ごと1冊特集を組み「保育特集」「お医者さん特集」「子育て応援BOOK」といった、データを中心にしたものもある。それぞれ3,000部から7,000部を発行している。

2004年春、リニューアルとして16冊目になる『ままとんきっず only one』1号を発行した。

(ままとんきっず表紙)





## 2. 情報から様々な支援活動へ—やりたいことをやっていく

当初の5人以外に一緒に活動したいというお母さんが数人メインスタッフとして入り、またサブスタッフとして登録により必要なときに関わる形で参加するお母さんたちが70名から100名加わった。川崎地域は転勤族が多く、途中から働きに出る母親もいるため絶えず出入りはあるが、現在もそのくらいの人数がゆるく繋がっている状態で活動している。

また当時本作りと並行して始めたのは、子育て講座、子育てコンサート。コンサートは初年度行い反響が大きかったことから、その後も大体2年に1回は子連れコンサートを行っている。プロを呼んだり地域のアマチュアに参加してもらったりしながら続け、2003年からは多摩区の「たまたま子育てまつり」の一環として開催している。

子育て講座は様々なテーマで時期に応じて行ってきた。自主保育、親子旅行、アサーションなど、その時々で必要と思われること、自分たちが興味のあることで講師を頼んでいる。これは現在も、「子育てを楽しくするための知恵袋講座」、「スタッフ養成のためのカウンセリング研修」などと形を変え、連続講座として年に数回行っている。時には行政や機関の委託、助成事業としても行う。

発行約2年目で、独自の事務所を地域内に構えた。増大する資料、また打ち合わせに必要な場所がどうしても必要となったため、安いぼろアパートを借りたのである。そこにスタッフの希望で、週に2回サイクルスペースもオープンした。主に子ども服を扱い、格安で販売したためあまり収益にはならなかったが、常連のお母さんたちが来るようになった。時には地域のフリーマーケットへ品物を持っていき、売り上げを収益とすることもあった。

同時に、子育てサロンや保育付き英語講座も始めた。サロンは、月に1度おやつ作りをしながらおしゃべりをするという会であった。

その頃から、情報誌だけではこぼれてしまう子育ての知恵を集めた単行本を作りたいという声が出始め、年に1、2冊の割で単行本作りにも着手するようになった。現在まで15冊を制作、中には台湾、韓国、中国で翻訳出版された本もある。

また、短期間で消えてしまうイベント情報を集めたミニコミ紙「ままとんきっず通信」の発行も始めた。

お母さんたちのエッセイや詩、マンガなども載せており、そこから生まれた単行本もある。当初は月刊で4ページであったが現在は情報量が増え10ページとなり、隔月刊になっている。

## 3. 心のケアをしよう！—相談事業への取り組み

そういう活動を続けながら傍らで感じていたことは、情報や講座・イベントの機会がいくらあっても、どうも子育てが楽になっていないのではないかという漠然とした不安であった。その頃から虐待や育児放棄、若年犯罪、登校拒否など子どもを巡る問題がマスコミで騒がれるようになり、母親の責任が追及されるようになってきていた。実際、活動に関わっている30代の母親の中に子育てに自信がなく不安定な心を持つ人達が増えているような印象を強く感じるようになった。一方で、インターネットによる情報の膨大な波が押し寄せ始めていた。

情報誌を出すことで、地域内で子育てすることができずに都心まで子連れで遊びにいていた親たち、また転勤してきて初めての土地で第1子を生み、仲間のいないまま孤立化して公園に出てくることもおっくうになっているお母さんたちに、地域を見つめ直そう、地域で子育てしよう、出ておいで、という呼びかけにはなった。しかしそれだけでは子育ては楽になっていかないようだ。また膨大な情報に翻弄され、それがかえってストレスとなり、自分の子育てを作り上げることができない親が増えているという思いも強まった。

情報がいくらあっても、心が不安定では子育ては楽にならない。では、どうしたらいいのだろう。情報を発信しているものの役割として、心のケアを担うべきではないのか。相談事業を始めよう。日本で初めてのお母さんたちによる子育て電話相談が始まった。まず相談スタッフとして新たにメンバーを募集し、半年間の研修を行い、新たに電話を引いてスタート。週に2回、午前午後2名態勢で、聞くことをメインにした電話相談「おしゃべりライン」である。これは現在も続けており、相談件数は1日3、4件だが、リピーターもおり話は1時間以上になる時もある。相談内容は年々深刻化しており、スタッフも絶えず研修の必要があるため、スーパーバイザーに定期研修をお願いしている。

そして電話相談を始めてほぼ数ヶ月後に、生協からの委託事業としてメール相談を行うようになった。生



協のホームページ上で行う子育て相談であり、相談・回答ともホームページ上で公開されている。チャット形式ではなく、相談に対してスタッフが数名でそれぞれ回答を書く。それをとりまとめる人間が様々な考え方を示唆しながら回答するという形を取っているため、回答に偏りが無い。だが、作業的には大変時間のかかるものである。本年、その内容をまとめたものを単行本として出版し、話題を呼んでいる。

#### 4. 場の拡充と法人化 — 新たな連携の始まり

その後、事務所をマンションのワンルームに移転したが、スタッフ数が増え、サロンも参加者が増えてきたために場所が狭くなり、また移転した。現在はJR南武線稲田堤駅から徒歩5分の助産院の離れを借りている。ここは70平米ほどあり、フリースペースと事務スペース、6畳の和室、風呂、台所、屋根裏も完備しており、宿泊もできる施設である。助産院の隣ということもあって、お産後すぐにサロンの利用者になるお母さんも多い。サロンでは自由にお茶を飲みながら歓談する時間もあれば、離乳食作りや子守歌を学ぶ機会、またアサーション、ビーズ手芸などの講座も設けている。利用者の自主企画もあり、親子で周囲に気兼ねなく旅行がしたいということからバスを借り切って親子旅行なども行っている。

基本的に0歳から未就園児を対象としているが、前述したように助産院横のため0歳児が圧倒的に多く、ベビー布団を敷いて赤ちゃんを寝かせ、その横でお母さんまごろ寝というような姿も多く見られる。



事務所内フリースペース

2002年7月、事業の広がり和社会的責任を考え、継続して活動を行っていくための基盤作りとしてNPO法人を取得した。これまで積み重ねてきた活動に新たな取り組みを加え、下記の事業を実施する団体として再スタートしたのである。

- 子育てに関する情報収集と提供
- 子育てに関する相談
- 親子のつどいの広場
- 子育て支援に関する講座・研修等の企画運営
- 子育て関連サポート
- 講演会、講座講師等派遣
- 子育てに関する調査研究・啓発
- 子育てに関するネットワーク運動への参加
- 子育て関連団体に対する支援・助成と共催

法人化により、事務や経理の作業量は増大したが、委託事業を受けることも多くなってきた。多摩区の保健所の委託で行った母子手帳と同時に配布するための情報誌作りやホームページ作り、また調査研究、啓発冊子作り、講座委託など、行政との協働も増えてきている。施策作りの委員会への参加や講座、講演会講師の依頼も増えた。

また最近の事業としてはネットワーク（多摩区内、川崎市内、神奈川県内ほか）活動があげられるだろう。2003年、区内の子育て支援関係者（行政、社会教育協議会、NPO、民間、サークル、学校、保育園等関係者）のネットワークをベースに多摩区で初めて行った「たまたま子育てまつり」（前述）には約2,500人の親子が参加し、企業等も含め80団体が協力しあった。市域のネットワークでは共同の調査研究、県域のネットワークでは県委託の調査やフォーラムが行われている。

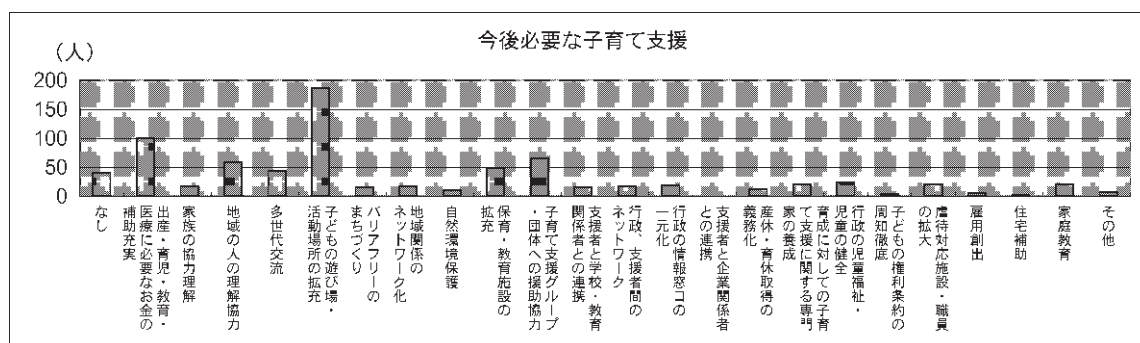
#### 5. 子育て支援、今後の問題点

現在でこそ、少子化対策、子育て支援、次世代育成プランなど行政もようやく子育て支援施策をどんどん行うようになってきたが、それまでの社会の目は母親に優しくはなかった。私たちも、活動から5年間ほどは、行政や地域から何度も「母親ごときが何をしている」というような冷たい扱いにあった。また、支援関係者同士の軋轢もあった。それでも自分たちにはこれが必要という強い思いがあったから、この10年間懲りずに続けてこられたのだと思う。しかし道は平





県内調査グラフ



坦ではなく、継続が厳しいことには現在も変わりはない。活動がボランティアとしてしか認められないため、子育て支援に使える安い手軽な労働力として扱われている部分は否めない。NPO になってもそれは大きくは変わらない。地域で子育てといいながら、実はまた母親が家庭に引き戻されようとしているのではという懸念もある。

県内の調査を行って、現実問題として母親達が求めているのは「子どもの遊び場・サークル等の活動場所」であり、「子育てにかかる資金（医療・育児・教育等）援助」であることが明確になっているが、それらはボランティアの扱える範囲のことではない。基本的には都市開発で遊び場を減らし、子育てにお金をかけてこなかった行政の問題である。

子育てとはなんなのか、母親支援とはなんなのか、根本的な問題をそろそろ見極める時期に来ているのではないだろうか。

特定非営利活動法人 ままとんきっず

TEL：044-945-8661

FAX：044-945-8662

<http://mamaton.parfait.ne.jp/>

〒214-0003 川崎市多摩区菅稲田堤 3-5-43

(ありきた・いくこ 特定非営利活動法人ままとんきっず代表理事)